第1巻のまえがき

坂本一民

本巻は、そもそも化粧品とは何かについて、社会生活を営む人間という存在と化粧との関わりを中心に考えたときの、消費財である化粧品における科学と技術の役割を考えるヒントとなる考察を含んだ情報の提供を、各分野のエキスパートに執筆して頂いた。

第1章は「化粧品科学と社会」の題で、能崎章輔氏に本巻の主旨を総合的に俯瞰すべく、化粧品と社会的存在としての人間との関わり、我が国における化粧文化の変遷、科学技術視点での日本の化粧品技術の進展、産業としての化粧品業界における科学技術者の役割を中心にまとめて頂いた。

第2章は「化粧心理学」と題し、阿部恒之氏に東西文化の対比の中で、化粧品の歴史を心理学の視点からまとめ、次いでスキンケア、メーキャップ、フレグランスについての心理学を各論的に記述し、最後に化粧行動について心理学的に解説頂いた。

第3章は「化粧品の皮膚科学的応用の利点」と題し、菊地克子氏、田上八朗氏の共著により、皮膚科医の立場からの化粧品の有用性について、化粧品の商品ジャンルごとに解説頂いた。あわせて患者の生活の質（ＱＯＬ）の向上に資する化粧品の役割についても触れて頂いた。

第4章は「スキンケアサイエンスの進化と今後の発展」と題し、細井純一氏、小山純一氏、尾澤達也氏の共著により、化粧品における皮膚科学の役割について治療治癒を目的とした皮膚科医が扱う対象とは異なる視点で、健常な状態の皮膚を知ることの重要性、そしてスキンケアサイエンスを基盤とする化粧品開発への期待とその将来展望にも触れて頂いた。

第5章は「化粧品の安全性とその評価」と題し、原田房枝氏、増田光輝氏の共著により、化粧品は安全であるという前提で消費者が日常的に用いることから、製品の提供者側に求められる厳しい安全性管理に関して、安全性ということの基本、化粧品の安全性に対する考え方とその保証のあり方、評価法プロセスの概論をまとめて頂いた。

第6章は「化粧品規制」と題し、高橋守氏、坂本一民の共著により、消費財である化粧品

の安全性を確保するための行政側の施策としての化粧品規制についてまとめた。今日の国境を越えた商品の流通の中で、規制の国際的統一への努力なども踏まえて、日本と各国・地域の化粧品規制の差異を特に表示と成分にいて項目別に解説した。

第７章は「化粧品の開発と知的財産権」と題し、北野健氏より化粧品に関わる知財権の考え方と必要性、知財権の種類についてまとめて頂いた。特に特許法については、その基本に関する説明とあわせて、コラム形式で具体的な項目のわかりやすい解説も入れ、さらに研究開発において求められる知財権への理解と実務上の心得を提示頂いた。